# 令和８年度　入学者選抜試験問題

## 国　　語

〔100 点
50 分〕

実施日：令和８年１月 22 日（木）

※下記の〈**注意事項**〉をよく読み，監督者の指示があるまで開かないこと。

## 〈注意事項〉

**―　開始前　―**

１．**試験時間**は 10：20～11：10 の **50 分**であり，途中退室は認めない。
２．**監督者の〈開始〉の指示があるまで，この問題冊子の中を開かないこと。**
３．解答用紙には，解答欄のほかに，**受験番号・氏名の記入欄**があるので，下記を参照し**記入・マークする**こと。
　**●受験番号欄**　上段に受験番号を記入し，さらにその下のマーク欄にマークすること。
　**●氏名欄**　　氏名・フリガナを記入すること。
４．解答用紙に**汚れ**がある場合には，挙手で**監督者に知らせる**こと。

**―　開始後　―**

１．この問題冊子は **25 ページ**である。確認してページの**落丁・乱丁・印刷不鮮明等**がある場合は，挙手で**監督者に知らせる**こと。
２．解答は，すべて解答用紙の所定の欄への**マークによって行う**こと。
例えば［ 40 ］と表示のある問いに対して③と解答する場合は，次の(例)のように解答番号 40 の解答欄の③にマークする。

（例）

| 解答番号 | 解答欄 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| 40 | ① | ② | ● | ④ | ⑤ |

３．**マーク**は HB，2B，B の鉛筆で行い，所定欄以外にはマークしたり，記入したりしないこと。
４．**解答用紙は汚したり折り曲げたりしない**ように特に注意すること。
５．訂正は，消しゴムであとが残らないように**完全に消し，かすが残らないようにする**こと。
６．**質問等**がある場合は，挙手で**監督者に知らせる**こと。
ただし，問題に関する質問は受け付けない。

（問題は次のページから始まる）

## 第1問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

都市住民の農山村への関心が高まっている。これを、大時代的な表現ではあるが、国民の「田園回帰」と呼んでおこう。

この田園回帰とは、必ずしも、農山村移住という行動だけを指す狭い概念ではない。（　a　）、農山村（漁村を含む）に対して、国民が多様な関心を深めていくプロセスを指している。しかし、この「関心」は、農山村の生活、生業、環境、景観、文化、コミュニティ、そしてそこに住む人々そのものに対する何がしかの共感を含むものであり、最終的にはそこへの滞在や移住への思いにつながることが予想される。

つまり、農山村への移住に対する願望の大きさ[A]は、そのまま国民の田園回帰傾向を表していると捉えられる。

農山村移住の実態を探るため、次の二名の事例を紹介しよう。

〈新潟県十日町市・Aさん（男性・三六歳）〉

Aさんは、東京都二三区内で生まれ、三一歳だった二〇一〇年に新潟県十日町市へ移住した。学校卒業後、東京で教育関係の仕事に就いた。収入は悪くはなかったが、忙しい職場で、三ヶ月無休だったこともあった。四年間頑張ったが体を壊し、退職した。

十日町市の地域おこし協力隊のことを知ったのは、偶然だった。前から、旅行好きで、田舎に住みたいと思っていた。特に新潟県をはじめとする日本海側の地域には、今までの旅行で出会った食の豊かさやそこに住む人の温かさ、そして雪の存在によりはっきりとした四季があることに好印象を持っていた。ちょうどその時、新しい仕事を探していたこともあり、応募したら採用された。

十日町市の仕組みでは、地域おこし協力隊は三年間の任期中、担当地域内に住むことが条件なので、そのまま紹介された古民家の空き家を家賃三万円で借り、住み込んだ。採用直後に、集落の世話役から、「担当地域の三集落に独居のおばあちゃんが三人いるので仲良くしてくれ」と言われ、まずはそのおばあちゃんたちの話し相手になった。そこから始めて、他の家からも草刈り、通院のための送迎、庭木の枝打ち、荷物の移動などいろいろな仕事を頼まれたが一切断らなかった。（　b　）、一年間で、三集落八〇世帯のうち半分

の約四〇世帯の仕事を手伝っていた。また九割のお宅に上がり込んでお茶を飲むまでになった。

最初は、徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」から発想した、「山菜ビジネス」のような自分なりの新しい仕事づくりのアイディアを持っており、それを地域の人に話したりした。（　c　）、一～二ヶ月でその構想は引っ込めた。むしろ、いろいろと手伝いをする中で、逆に田舎のおやじやおばあちゃんはすごい人たちばかりで、知恵をいっぱい持っていることに気がついたからだ。［　X　］だめだと思った。いろいろと手伝っているつもりだったが、実際には、本当に力になれるようなことは一％もないと思いはじめた。例えば、自分の車が山道の溝にはまって動けなくなった時に、あっと言う間に集落の人が救援に来て、驚くような技術で助けだしてくれたことがあった。その（　甲　）や適切な人に情報が届くネットワークに圧倒された。ここの人たちの暮らしの技術の高さに驚嘆した。

また、いろいろと手伝う過程で、集落の温かさに触れた。住み込んだ家は古かったが、その改修も集落の人たちからお世話になった。そのため、今から振り返ると、地域おこし協力隊として、「地域の方々をお世話した」という意識は全然ない。むしろ、お世話され続けていた。集落に住んだことが、形にはならないようなことだが、自分には身になった。

二年目からは、人脈がどんどん広がっていった。集落の高齢者世代とかかわったことで、その子ども世代のおやじさんたちから、いつのまにか「年寄りに良くやってくれる」と信頼されるようになっていた。その流れで、地域内の三戸で運営する小さな直売所のリニューアルに関係するようになった。それが、十日町を中心に行われる「大地の芸術祭」の関係者につながり、さらに東京の代官山でほぼ隔週ごとに開催される「代官山朝市」への、十日町からの野菜出荷にかかわるようになった。この過程で、地域からますます信頼され、周辺からは「Aさんならあの集落周辺の農家のことなら何でも知っている」と思われるようになった。

任期が終了した二〇一三年からは、今度は十日町市の地域復興支援員として、ＮＰＯ法人十日町市地域おこし実行委員会に所属し、「里山プロジェクト」という名で先の野菜流通の仕組みのさらなる拡充を担当している。現在では、市内の学校給食、福祉施設、旅館、地域内外のレストラン――東京都内では四つの有名レストランとの取引に広がっている。

（　d　）、旅行会社とのつながりもでき、里山ガイドの仕事を後任の地域おこし協力隊と集落の人々と一緒にするようになった。

雪を利用したスノーシュー（西洋版の「かんじき」を利用した冬山歩き）や除雪体験、田んぼの生き物体験、農家でのお茶飲みなどを組み合わせたプログラムに挑戦している。今後は、インバウンド観光（外国人観光）も構想している。

このように、地域の現場にはいろいろとビジネスの素材がある。業を新たに起こすこともできるし、今ある仕事をつなぐことも考えられる。地域の中に深く入り込めば入り込むほど、仕事の芽となるものが見えてくる。その点、このように地域に密着する協力隊の仕事の仕方で良かったと思う。

協力隊時代の三年目には、以前から交際していた女性と結婚した。彼女は東京で携帯電話の開発にかかわっていたが、退職して十日町に来て、借りていた古民家に一緒に住みはじめた。地域の人たちが、最初から妻を「むらの娘」のように扱ってくれたことも嬉しかった。

夫婦の所得目標は三〇〇万円で、現在はそれを達成している。ＮＰＯ勤務に加えて、新聞配達、地域の農業生産組合のオペレーター、里山ガイド、棚田無農薬米づくりから収入を得ている。妻も、地区内にあるそば屋でアルバイト収入を得ている。Ａさん本人は、最近、市が推進する健康体操のインストラクターの資格を取って教室の講師も始めた。[B]これは、地域の人々にとっては「寝たきりにならずに人生を終える」ことがなによりの希望だということを実感したためだ。これもわずかだが収入になっている。

〈島根県邑南（おうなん）町・Ｂさん（女性・三〇歳）〉

Ｂさんは、二〇一一年四月に、夫婦で広島県から邑南町に移住した。山口県のある町の出身で、東京の大学を経て広島市内の広告代理店で五年間、勤務した。同じ会社の男性と二八歳の時に結婚した。不規則でハードな仕事でもあり、二人とも何か新しい仕事をしたいと話していて、どこかで二人が好きな雑貨屋やカフェができれば良いと考えた。農村には観光客の流れもあるので、（　乙　）もあると思った。そこで選んだのが邑南町だった。邑南町は夫の父の出身地で、今でも祖父母がそこで暮らしている。

二人で退職して移住しようとしたが、夫が会社から、移住後も自宅をオフィスとして島根支店にすれば良いという提案を受け、現在でも広告の仕事を継続している。自分自身は半年間、地域おこし協力隊として観光協会の仕事を手伝った。そこでは、移住前の経験を

いかし、観光パンフレットや観光用のホームページの更新を行った。その後、二〇一三年四月からは役場の農林振興課の臨時職員（一年更新）として働いている。この仕事は、町内のケーブルテレビで求人を知り、応募した。

移住後は町の移住者用住宅に入った。この町にはスーパーマーケットも病院もあり、不便とは思わない。今は、夫婦のそれぞれの仕事に加えて、祖父母の農地を借りてイチゴやイモの栽培も始めた。頻繁に、祖父母の家を訪ねることができることも嬉しい。

また、やりたかった起業に向けた準備も進めている。すでにそのための古民家も購入した。その場所で、二〇一五年三月を目標に、土日だけオープンの古民具店を開業するつもりだ。そこで、カフェやヨガ教室もしたい。町には、雑貨屋やカフェがほとんどないので、人が集まる場所をつくりたい。ヨガは、広島時代にインストラクターの資格を取っていたが、今は町の健康センターでもヨガ教室を開催している。

この町に来て、一番良かったことは、人とつながれること。その気になれば、すぐつながる人が見つかり、その縁でさらにつながりが増えていく。今の生活にはその実感がある。

この二人を含めて、筆者によるヒヤリングからは、農山村に移住した者にかかわるいくつかの特徴的な傾向が浮かび上がってくる。

第一に、移住相談件数の動向でも現れていたように、最近ではやはり二〇～三〇歳代の移住者が目立っている。鳥取県のデータで見れば、二〇一三年に移住した六二三世帯のうち、世帯主年齢が二〇歳代以下の世帯は二六六世帯（四三％）、三〇歳代が一四〇世帯（二二％）であり、両者合わせて全体の約三分の二を占めている。他方で「団塊の世代」を含む六〇歳代は九一世帯（一五％）となっている。

第二に、若い夫婦での移住が多いことである。直前に見た邑南町のBさんの移住事例もそうであった。また、単身女性やシングルマザーの移住事例も報告があり、女性の数と割合は確実に増えていると思われる。このことは、従来の若者移住者が圧倒的に単身男性であったことを考えると、大きな変化と言える。

そして、第三に、移住後の職業は、従来は専業的農業就業を目指す者が多かったが、必ずしも農業のみではなくなってきている。む

しろ、農業を含めた、いわゆる「半農半X型」[c]が多数を占めている。（　e　）、兼業農家または自給的農家を目指し移住を始めるケースが目立つ。別の表現をすれば、非農業を主な仕事として選択しても、何らかの形で農業にかかわる移住者が多い。事例として見た、Aさん、Bさんもそうであった。

第四に、移住の入口として、地域おこし協力隊などの制度を積極的に利用する者が多いことである。これは、移住者にとっては、協力隊という仕組みが、移住のハードルを下げる役割を果たしていることを示唆している。しかも、協力隊の任期を終えた後は、従来からの行政との関係もあり、行政の臨時職員やかかわりのあるＮＰＯや第三セクターの職員として、先の「半農半X」の「X」の部分を埋めている者も少なくない。

第五に、農山村移住の多くは、都市出身のいわゆる「Iターン」であるが、それが地元出身者のUターンを刺激している事例も登場している。IターンもUターンもともに進行する地域もいくつか見られる。また、その場合、先の邑南町のBさんの例で見られたように、祖父母の居住地域に「戻る」孫世代の動き、つまり「一世代飛び越し型Uターン」も散見される。移住はいろいろな新しい現象を生み出している。

以上のように、政策的な支援に支えられつつも、若者や女性の増加という、移住者の構成自体の変化、また「半農半X」的な仕事の選択という変化が生まれている点が注目される。そして、それに加えて強調されるべきは、移住者の（　丙　）である。女性が増えてきたことはその表れであるが、実に多様な移住動機があり、多彩な職業選択がなされている。このことは、特に、政策的対応を考える際に、前提とすべきポイントではないだろうか。

（小田切徳美『農山村は消滅しない』より）

問1　本文中の（　a　）～（　e　）に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は（　a　）1、（　b　）2、（　c　）3、（　d　）4、（　e　）5

① しかし　② むしろ　③ つまり　④ さらに　⑤ その結果

問2　本文中の（　甲　）～（　丙　）に入る語句として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選びなさい。

解答番号は（　甲　）6、（　乙　）7、（　丙　）8

甲　① 臨場感　② 高揚感　③ スピード感　④ 効率感　⑤ 効用感

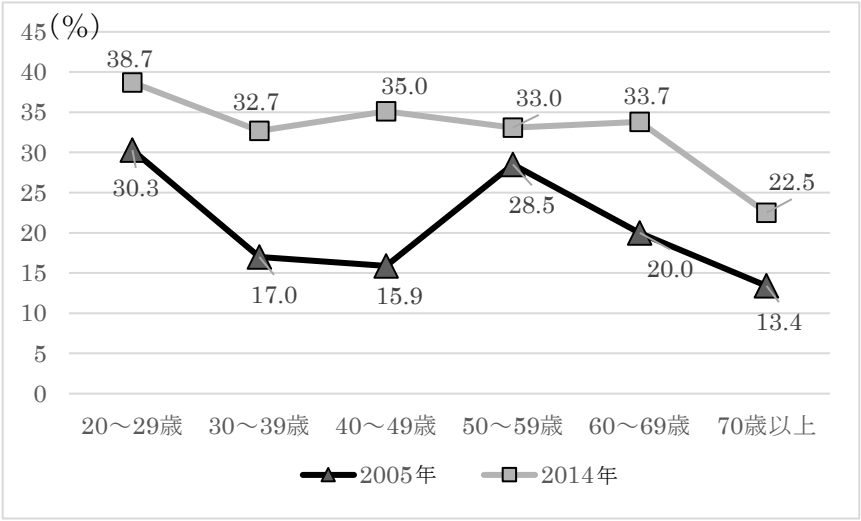
乙　① 将来性　② 説得性　③ 汎用性　④ 流動性　⑤ 関係性

丙　① 主体性　② 多様性　③ 積極性　④ 確実性　⑤ 固定性

問３　傍線部Ａ「農山村への移住に対する願望の大きさ」について理解を深めるために、教師から３つの資料が提示された。以下は本文と資料に基づいた教師と生徒の対話である。空欄Ｏ～Ｑに入るものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は Ｏ 、 9 、 Ｐ 、 10 、 Ｑ 、 11 。

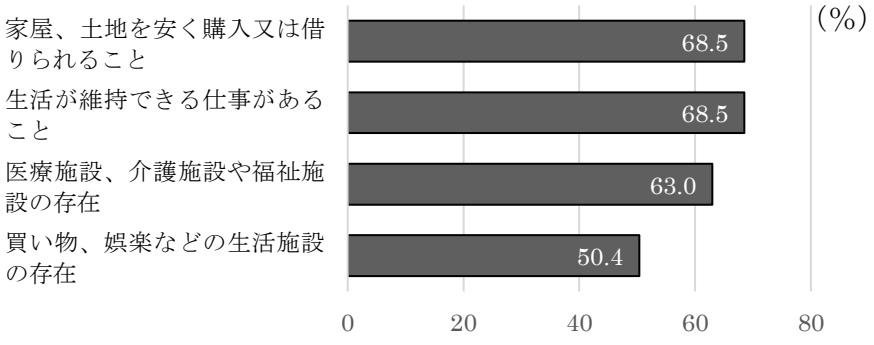
【資料１】は、都市住民に対して農山漁村地域への定住願望の有無を尋ねた際に、「ある」「どちらかといえばある」と答えた者の割合である。

【資料１】




出典：内閣府　「農山漁村に関する世論調査（2005 年・2014 年）」より作成

【資料２】は、農山漁村地域への移住願望が「ある」「どちらかというとある」と答えたものに対し、移住するために必要なことへの回答（上位４つ）である。（複数回答）




出典：内閣府　「農山漁村に関する世論調査（2021 年）」より作成

【資料３】

「ナリワイで生きるということは、大掛かりな仕掛けを使わず、
生活の中から仕事をうみだし、仕事の中から生活を充実させる。
そんな仕事をいくつもつくって組み合わせていく」

（伊藤洋志　『ナリワイをつくる』）

教　師　――【資料１】で農山漁村への定住の願望があると答えた率が最も低いのは70歳以上ですが、配布資料から推測できる理由は何であると考えますか。

生　徒Ｃ――（　　Ｏ　　）からだと思います。

教　師　――では二〇〇五年と二〇一四年を比べた場合、どのような特徴が見られますか。

生　徒Ｄ――30～39歳と40～49歳で、定住願望があると答えた人の割合が大きく増加しています。

教　師　――本文を踏まえると、その理由としてどのようなことが考えられますか。

生　徒Ｄ――【資料２】では移住のために必要なこととして生活が維持できる仕事があることを挙げている人が多いですが、本文で紹介されているように（　　Ｐ　　）ことで課題が解決できたのではないでしょうか。

教　師　――Ｄさんの言ったことと関連して、【資料３】の「生活の中から仕事をうみだし」という部分を、本文でＡさんはどのように述べていますか。

生　徒Ｃ――（　　Ｑ　　）

教　師　――そうですね。

O

① 【資料１】から年齢が高くなるほど農山村漁村地域への移住願望が低くなる
② 【資料１】から高齢になるほど、新しい環境に挑戦することが難しくなる
③ 【資料２】から移住に必要なこととして、医療施設や介護施設などの福祉施設の存在をあげている人が多い
④ 【資料１】と【資料２】から、70歳以上の人たちは、他の世代よりも生活を維持することを重視している

P

① 一つの仕事から収入を得るのではなく、地域に密着した仕事をいくつか組み合わせて生計をたてている
② 一人が移住する前の仕事を、リモートワークなどで継続することにより、安定した収入を得ている
③ 古民家の空き家を借りたり、移住者用の住宅に住み、地域の方々の協力で修繕したりする
④ 仕事で収入を得ること以上に、人とのつながりという大切なものを実感しながら生活している

Q

① 今後は、インバウンド観光（外国人観光）も構想している
② 集落に住んだことが、形にはならないようなことだが、自分には身になった
③ いつのまにか「年寄りに良くやってくれる」と信頼されるようになっていた
④ 地域の中に深く入り込めば入り込むほど、仕事の芽となるものが見えてくる

問4　空欄［　X　］に入るものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。
解答番号は 12

① 外から、実態の伴わないアイディアを持ち込んでは
② 地元の人たちが実行できないアイディアを持ち込んでは
③ 田舎暮らしについて知恵を持たない自分が意見を言っては
④ 地域の人をお世話をしているという感覚で意見を言っては

問5　傍線部B「健康体操のインストラクターの資格を取って教室の講師も始めた」理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。
解答番号は 13

① 結婚したので夫婦の所得を少しでも増やしたいと考えたから。
② 自分の趣味を生かしつつ、健康な生活につながると考えたから。
③ 地域の人々の希望を助けるものであり、自分の収入にもなるから。
④ 以前に教育関係の仕事についていたことが生かせると考えたから。

問6　傍線部C「半農半X型」の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。
解答番号は 14

① 農業からの収入を半分維持しながら、行政の臨時職員やかかわりのあるＮＰＯや第三セクターの職員として収入を得る形
② 専業的農業就業を目指すのではなく、何らかの形で農業にかかわりながら、経験や関心から様々な仕事を組み合わせる形
③ 農村で暮らしながらも、農業に従事するのではなく、今までその地域になかった新しい仕事を生み出して従事する形
④ 収入を得るために農業を行うのではなく、自給的な農業をしつつ、地域の高齢者を支援するための仕事に従事する形

問7　本文の内容と一致するものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。
解答番号は 15

① 都市住民の農山村への関心の高まりがみられが、その関心は、必ずしも農山村の生活、生業、環境、景観、文化、コミュニティ、そこに住む人々に対する共感へとつながるものとはならず、移住に結びついていない。
② Aさんは、移住した先でおばあちゃんの話し相手になるなど、地域の人たちのために働くことにやりがいを感じ、草刈りや通院のための送迎など、地域の方々をお世話した達成感により、自分自身も成長したと感じた。
③ Bさんが、移住して一番良かったと思うのは、安定した仕事で収入を得ながら、農地を借りてイチゴやイモの栽培を始めたり、夫婦の夢であった雑貨屋やカフェなどの起業に向けて、着々と準備が進んでいることである。
④ 農山村への移住の多くは、都市出身のいわゆる「Iターン」であるが、それが地元出身者のUターンを増やす契機になるなど、移住はいろいろな新しい現象を生み出すとともに、移住者の多様性が進展している。

（問題は次のページから始まる）

## 第2問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学校の英語の教科書は、低学年においては生徒が英語で、何よりも自己表現できることを目指して、身近な事物や毎日の学校で起こることなどを題材にしたらよいと思います。つまり子供たちが、身のまわりの事物、目に入る、あるいは耳にする普通の出来事などについて、英語ではそれを何と言うのだろうかと考えるように、無理なく自然にユウドウ(ア)するのです。そのためできるだけ単語を多く覚えられるような、遊びやゲームを工夫することも大切でしょう。

たとえば生徒たちに人の顔の絵をおもいおもいに描かせて、そこに目、耳、鼻、口、あご、唇といった英語の単語を書き入れさせ、そして皆で大声をあげてeye, ear, nose, mouth, chin, lipという具合に発音練習をします。

ついで全身に移って身体部分名称をどんどん競争で言わせ、誰も分からないものは先生が補いながら、単語の数を増やしてゆく。次にこれらの身体部位を使う動作や機能を表わす、やさしい動詞を加えたり、形容詞を組み合わせるなどして、I see with my eyes. I bite with my teeth. We have two hands.といったような短文を考えさせ、それを声をだして言わせたりします。

a　この意味では英語で短い日記をつけることも、大変役に立つでしょう。

b　これらを適切でしかも基本的な動詞や形容詞と組み合わせれば、じつにいろいろなことが、体や心の動きについて言えるようになるのです。

c　つまり自分たちが日々の生活の中で経験する基本的な身体精神現象を、生徒たちが簡単な英語で表現できることを目標に指導するわけです。

d　ためしに数えてみますと、頭と顔だけで約二十の単語があり、手足をふくめた体全体では、更に三十くらいの基本単語があります。

e　「頭が痛い」「気持が悪い」「昨晩夢をみた」「あんた嫌いよ」のように自分の感情、経験をできる限り英語化することです。

ところがこのような身近な英語の単語の中には、現在では外来語として、生徒たちがそれとは知らずに使っているものが、かなりあります。このようなカタカナ[A]語との関連をうまく指摘しながら授業を進めてゆけば、英語などめんどうだ、関係ないやといったキョ(イ)ゼツ感が減り、だんだんと面白くなって、それこそゲーム感覚でどんどん覚えてしまうものです。

私はかつて孫の一人と車で長時間走ったとき、後ろの座席で退屈している彼女に、英語ゲームをしようと言って、子供が普段当たり前に使っていると思われる外来語を、次々に言わせたことがあります。たとえば「トンカツのお皿にいつもついてくる、細く切った野菜の名は何」というふうにしてキャベツと言わせる。そして「それ英語なんだよ。ちょっと言い方は違うけどね。キャベッヂ」といった具合です。また車が赤信号で止まると、「赤って他に何て言ったっけ」と聞くとレッドが出てきました。そうすれば後はグリーン、ホワイト、イェロー、ブルー、ブラック……とかなりの数のシキサイ(ウ)語を引き出すのは簡単です。

こんな遊びで何と二百近くの英語を、小学校一年の子供が既に知っていることが分かり、私も驚きましたが本人も、「へーエ、英語ってやさしいんだね」といった調子で喜んだことがあります。

このような教え方の重要なねらいは、何よりも子供が自発的に面白がって、自分を中心としたまわりの環境を、英語という「めがね」をかけて能動的に眺めて表現すること、つまり本人に「英語で生きる」体験を味わわせることにあります。そして今の日本の社会には、せっかくカタカナ英語が氾濫しているのですから、それを逆手[B]にとって、大いに利用すべきなのです。

現場の先生方には、こんなことではあまりに幼稚ぽくて、いくらなんでも今の中学一年生の知的レベルには、低すぎる目標設定だと思われるかもしれません。しかし入口はやさしくても、この切り口[C]から入るとすぐ後が開けるから不思議です。

これまで一般に学校での英語の時間といえば、教科書の中に生徒たちの自発性とは無関係に、既に誰か他の人によって表現されてしまっている、ちゃんとできあがった、それだけに生徒からはユウ(エ)リした、客観的な学習対象としての、冷たい英語が並んでいるわけです。これを生徒が外側の視点から学ぶことを求められるため、英語作品を分解して理解することが英語の勉強となってしまい、結局はただ覚えて暗記するという、面倒な仕事になるのです。

私のいう発信の手始めとは、生徒が英語という外国語を、単なる道具の一種として、まるで鋏（はさみ）やカッターで紙を切ったり、くりぬいたりして自分の思う形の切り絵を作るような気持で、身のまわりの世界を切り取って、自分が思うような形に仕上げることなのです。

つまり生徒たちが、うまくゆかなくてもよい、少しくらい手を切ったり失敗があるかもしれないが、とにかく自分で能動的・積極的に、鋏のつもりで英語を使いだすのと、既にできあがった、自分とは関係のない、それも外国のことを扱った英語作品を、たとえて言えばまるで生命のない石膏（せっこう）像を前にして、それを眺めて、どこがどうなっているか、目と眉の距離を測ったり、鼻の高さをソク(オ)テイしたり（文法的分析）して、あれこれと考えることを求められるのかの違いが、能動的な学習意欲が湧くかどうかを決定的に左右するのです。

ひとたび自分からの自発と主体性を発揮して、自分なりの英語作品を勝手に作って構わないのだとなれば、学習の結果が信じられないほど違ってきます。

そしてこのようなことが、じつは日本人が英語を使って、日本側の情報を積極的に発信できるようになるのか、それとも外国についてただ学び、新知識や優れた技術を取り入れる受信型の、完全に受け身な英語学習で終ってしまうのかとの違いの根底にあるのです。

自分の世界を自分みずからことばで表現すること、これは誰でも日本語なら、毎日やっていることです。それと同じことを、英語という外国語でどこまでやれるか、けっして日本語の場合のように完全にはいきませんが、この到達度を上げることが、これからの［　X　］の目指すべき目標だと私は考えます。

そのためには、先の身体部分名称のようなものを手始めに、日常目にはいるもの耳にすることをできる限り、少なくとも単語のレベルで知っておかなくては駄目です。もし自分の言いたいことに必要な単語を知っていれば、文法や発音など少しくらい間違っても、自分の思いや考えは、具体的な場面さえあれば、相手に殆（ほとん）ど通じます。

ところが言いたいことについての単語を殆ど知らなければ、いくら発音や文法の知識が正確でも、伝達は成立しません。だから私はいつも学生には、学校にいない時でも、あたりを見てこれは英語で何と言うか、あれは何と言ったらよいかをつねに自問して、すぐ人

に聞くか、ポケットに入れた小型の和英辞典で調べる癖をつけるよう言っていました。一度これが癖になると、多くの人は意外にも病みつきになって、驚くほどの量の単語が覚えられるものです。

いま述べたようなわけで、現在多くの学生生徒が望む「会話ができるようになる」、つまり何についても自由に英語で話せるようになるためには、じつは殆どの人がいらないと思っている読書、つまり英語で書いたものを読むことも大切なのです。と言うのも、書いたものをたくさん読まなければ、まともな会話に必要な単語も適切な表現も覚えられません。しかもその際に音読すること、それも大きな声で繰り返し何度も読むことが、絶対に欠かせないのです。黙読だけでは決して進歩しません。外国語は頭で分かるだけではなく、積極的に口の筋肉を動かし、自分の声を自分の耳で聴き、そして書き写すことで手に覚えさせる、つまり全身を使って覚えるものだからです。

何しろ日本に暮らしていて、学校でのわずかの時間で、英語が何とか使えるようになろうというのですから、授業以外のときも、いろいろな英語の文章を声に出して何度も読み、自分の声（発音）を耳で聴いて、次にそれを紙に書いてみる。そしてできればその文が自然と口から出るまで繰り返し言ってみる、といったことを熱心にやらなければ、結局は会話も上手になりません。

学校の何十人ものクラスで、週に一、二度だけ外国人の先生について少しばかりの日常会話の練習などしてみても、それだけでは出てくる単語や表現の数は知れたものですし、話題も自分に興味のあるものとは限りません。このようなわけで、限られた学校の英語の時間は、遠回りのようでも、学校生活を含む日常卑近の出来事を英語で表現する練習や、日本を題材とした英文を読むことを中心にして組み立てなければ、結局会話も上達しないまま終わってしまうのです。もちろん昔と違って、ある程度の発音指導が必要なことは言うまでもありません。

この意味では、もっぱら本を読むことだけに専念すればよかった昔の英語の勉強の方が、はるかに楽だったといえます。それというのも、読書の場合は分からなくなれば辞書を見たり、考えこんだりすることができます。ところが相手がいる会話は、即決で待ったなしですから、すぐその場で反応しなければならないからです。

また読書だけの時代では発音は無視できましたが、会話ではある程度うまく発音すること、耳をよく慣らすことが更に加わるわけですから、二重三重に負担の大きい言語活動なのです。

こんなわけで、［　　Y　　］というのはまったく無理な注文で、日常生活で英語が用いられている国に暮らしているのならば話は別ですが、英語の必要のない日本にいる限り、ありとあらゆる、自分が利用できる手段と機会を積極的に利用して、しかも日本について書いたものをたくさん読んでおかなければ駄目なのです。

（鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』より）

問1　カタカナで書かれた（ア）～（オ）の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ①～⑤のうちから一つずつ選びなさい。

解答番号は（ア）16、（イ）17、（ウ）18、（エ）19、（オ）20

（ア）　ユウドウ

① 宇宙船がキドウに乗る
② 事件のドウカ線となる。
③ デンドウ入りを果たす。
④ 彼とは高校のドウソウだ。
⑤ 他国のドウセイを探る。

（イ）　キョゼツ

① ボウキョに出る。
② 法律にジュンキョする。
③ 申し出をキョヒする。
④ トッキョを出願した。
⑤ キョギの発言だ。

（ウ）　シキサイ

① サイショク主義だ。
② 彼女のサイハイに従う。
③ 公園のショクサイが見事だ。
④ 条約がサイタクされる。
⑤ セイサイを欠く。

（エ）　ユウリ

① 家畜をユウボクする。
② 執行がユウヨされた。
③ 多くの成分をガンユウする。
④ 人々を救ったエイユウだ。
⑤ 彼をユウグウする。

（オ）　ソクテイ

① 経済発展をソクシンする。
② ホウソクを見出す。
③ ソクセキを残す。
④ 結果をスイソクする。
⑤ 仕事がセッソクだ。

問２　本文中の［　　］で囲んだａ～ｅの文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。
解答番号は 21

① ａ―ｅ―ｂ―ｄ―ｃ
② ａ―ｂ―ｅ―ｃ―ｄ
③ ｂ―ａ―ｃ―ｄ―ｅ
④ ｃ―ａ―ｅ―ｂ―ｄ
⑤ ｃ―ｄ―ｂ―ｅ―ａ

問３　傍線部Ａ「カタカナ語との関連をうまく指摘しながら授業を進めてゆ」くことの重要なねらいとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は 22

① 子供が自発的に面白がって、能動的に自分を中心としたまわりの環境を英語で表現するようになること。

② 普段用いているカタカナ語が、実は英語であることを子供たちが理解し、表現活動に取り入れるようになること。

③ 小さいうちからカタカナ語が英語であることを知ることで、多くの英単語を学ぶことができるようになること。

④ 英語が身近なものであると実感し、英語ができるようになることを目標にする子供が増えること。

問４　傍線部Ｂ「逆手にとって、大いに利用すべき」の意味内容として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は 23

① 身近な生活の中で氾濫しているカタカナ英語の発音が、本来の英語の発音とは異なることは欠点であるが、その点を差し引いても、英語の学習を生活に密着したものとするべき。

② 小学生がどのくらいのカタカナ英語を知っているのかは、その子供が育った環境によって左右されてしまうという問題点はあるが、カタカナ英語が英語学習の基礎であることを認識するべき。

③ 生徒たちが、身近な生活の中にあふれているカタカナ表記の外来語について、それが英語であることを認識していないことをむしろ利用して、英語の学習が難しくないと思わせるべき。

④ 現在では外来語として、生徒たちがそれとは知らずに使っているカタカナ英語が氾濫しているという状況をむしろ利用して、「英語で生きる」体験を味わわせるべき。

問5　傍線部C「この切り口から入るとすぐ後が開ける」理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。
解答番号は 24

① カタカナ英語など、子供に身近なものから学習することで、英語学習はやさしいものであると苦手意識がなくなるから。
② 子供が「英語で生きる」体験を味わうことによって、能動的、積極的に英語を使うようになるなどの学習意欲につながるから。
③ 中学一年生の英語のレベルは高くないため、外来語などで基本的な身体精神現象を表現できるようになることが必要だから。
④ 英語の学習も基本が大切であり、基本的な単語や表現をマスターすることが、より複雑な表現方法を可能にするから。

問6　空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。
解答番号は 25

X
① グローバル教育
② 国際的な人材育成
③ 英語指導
④ 受信型教育
⑤ 発信型教育

問7　傍線部D「日本を題材とした英文を読むこと」の必要性として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は 26

① 自分とは関係のない、外国のことを扱った英語作品では能動的な学習意欲がわかないが、日本を題材とした英文を読むことで子供が自分を中心としたまわりの環境を英語で能動的に表現するようになるから。

② 外国について学び、新知識や優れた技術を取り入れるだけでなく、英語を使って、日本側の情報を積極的に発信できるようになるためには、日本文化や日本の歴史について知ることが大切になるから。

③ 生命のない石膏像のような冷たい英語が並んだ教材では生きた、実践的な英語力をつけることが難しいが、日本を題材にした英文を学ぶことで、日常生活に必要な英語を学ぶことができるから。

④ 外国のことを扱った英語作品を分解して文法や単語を学んだり、適切な表現を学ぶことは、実際に会話をする上では役に立たず、日本語を英語で表現したものを学ぶことが大切だから。

問8　空欄 Y に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 27

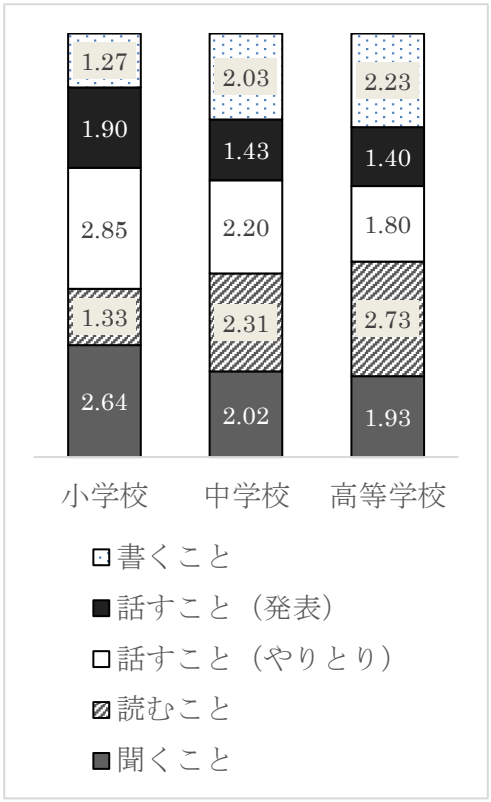
Y

① 努力はしたくないが英語がうまくなりたい
② 本は読みたくないが、英語で会話はしたい
③ 辞書を調べたくないが、英単語を身につけたい
④ 単語を覚えたくないが、英語が使えるようになりたい
⑤ 文法は学びたくないが、英語で話をしたい

問９　本文について理解を深めるために、教師から資料（令和５年度「英語教育実施状況調査」の概要の一部）が提示された。以下は本文と資料に基づいた教師と生徒の対話である。空欄Ｏ～Ｑに入るものとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は O 28 、 P 29 、 Q 30

＊資料の数値は、言語活動（時間）の全体を 10 としたときの、それぞれの活動の割合を示している。




教　師　――本文から、英語の学習に必要なことはとのようなことであると読み取れますか。

生　徒Ａ――教師の立場では、子供が自発的に面白がって表現することができるような素材などを使用することが必要になります。学ぶ方の立場では、（　　O　　）ことです。

教　師　――では本文を踏まえて資料を見た場合、どのようなことがわかりますか。

生　徒Ｂ――小学校では、話すことの時間が多いですが、これは（　　P　　）ではないでしょうか。

生　徒Ｃ――資料から（　　Q　　）ことが読み取れますが、これは本文で述べられている、英語学習について最終的には筆者が必要と考えていることにつながると思います。

O

① 身近な事物や毎日の学校で起こることなどを題材にして、英語でどのように表現するのかを考え、遊びやゲームなどを取り入れて、勉強を楽しいものにする
② 日本の社会にあふれているカタカナ英語を利用して、本来の英語ではどのように発音するのかを学び、日常生活の中から学びを深めることを意識する
③ 自分の言いたいことを表現するために必要となる単語を増やし、英語で書かれたものを音読したり、書き写したりして、会話に必要な単語や適切な表現を覚える
④ 限られた学校の英語の時間の中で、外国人の先生に対して、あれは英語で何と言うかなど、積極的に質問したり、生徒同士で話し合ったりしてコミュニケーション能力を高める

P

① これからの日本人には、自分の意見を英語で表現することが求められているから
② ゲーム感覚で英語を学ぶことが大切なので、小学生に負担のない方法が選ばれているから
③ 自分の意見を聞いてもらう機会を多く設けることで、英語を使うハードルを下げているから
④ 能動的な学習意欲をもたせるために、身近なことを英語で表現することが重視されているから

Q

① 中学校では、高等学校よりも、やりとりや発表などの話す時間が少なくなっている
② 中学校では、それぞれの活動について他の段階よりバランスよく時間が配置されている
③ 高等学校では、小学校や中学校よりも書くことや読むことに時間を多くとっている
④ 高等学校では、小学校や中学校よりも聞くことの時間が少なくなっている

（白紙ページ）

（白紙ページ）

（白紙ページ）